

薬物依存問題の 理解と支援に向けて

茨木市市民人権講座

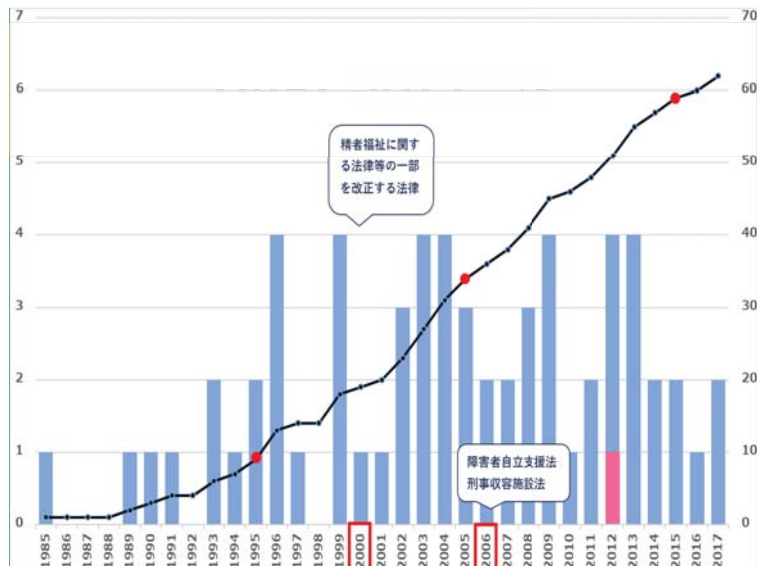
NPO法人アパリ 木津川ダルク 加藤 武士
2017年9月20日

DARC (ダルク)

Drug Addiction Rehabilitation Center

DARCとは

- 1985年7月 東京都荒川区にて始まる
現在61団体が87施設を運営・利用者約1000名。
- 薬物依存者による薬物依存者のための依存者回復支援施設。
- 薬物依存から回復したいと望む仲間の集まる場所。
- NA12ステッププログラムを安全、安心して実践できる場所。
(Narcotics Anonymous)



今日の乱用薬物

- **覚せい剤**
- 検挙人員 10,457名 (28年度、警察庁) 30代、40代が多い
- 再犯者率 65.1% (28年度、警察庁) 10年連続増加
- 中枢神経を興奮させる作用、感情の起伏が激しくなる

今日の乱用薬物

- **向精神薬の問題**
- エリミン、デパス、マイスリー、ロヒプノール、リタリン等
- 1人で多くの医療機関を受診し正規の処方薬を受け取る「多重受診」の手口が目立ち、処方箋のコピーや改ざんの例もある。
- インターネットを使った向精神薬の不正取引も多く、ベンゾジアゼピン系の使用障害も問題化。

今日の乱用薬物

■ オピオイド系鎮痛剤

2015年時点の推定で26歳以上の成人270万人が鎮痛剤を乱用。年間3万5千人もの死者。(アメリカ)

- OTC薬（痛み止め、咳止め、かぜ薬）

今日の乱用薬物

■ 大麻

- 検挙人員 2,536名（28年度、警察庁）10代、20代が多い
- インターネットの普及により栽培に関する情報入手のしやすさや個人輸入の気軽さにより大麻種子の輸入、自家栽培
- 文化としても広がり、ヨーロッパのハームリダクションなどによる大麻自己使用の非刑罰化における誤った知識の流布も影響。
- アメリカでの嗜好品の大麻解禁

病気か犯罪か

- 薬物によって問題を抱え人たち
- 使った薬物の種類や量、期間などは大きな関心ごとではない
- これからどうしたいのかということに関心がある
- 薬物使用を思いとどまりたくなる支援（依存の理解と行動）
- 使わない生き方を選択したくなる支援（回復の理解と行動）

共通の問題を持つ仲間として

- 動機は支援の中で育つ、支援開始時の重要な条件ではない
- 長期間にわたる当事者主導の回復に焦点を置く
- 正しさを強要せず、絶望を分かち合い希望を手に入れる
- 『You』メッセージではなく、『We&I』メッセージ
- 断薬を喜び合える関係

なぜ薬物（嗜癖）に向かうのか

- 失恋してしまい寂しかった
- 仕事が思うようにならない
- 受験に失敗して辛かった
- 誘いを断れなかった
- スポーツで挫折
- 楽しそうに見えた
- 家庭で色々問題がありむしゃくしゃしていた
- こころの痛みを何とかしたい
- 軽い気持ちで

生きづらさ、生きにくさ

- 孤独感
- うつ
- 疎外感
- 虐待
- 寂しさ
- 将来への不安
- イライラ
- 対人関係
- 怒り
- 人からの評価
- 低い自尊心
- 経済的困窮

アディクション（嗜癖）の対象

- 薬物
- アルコール・ニコチン・砂糖
- ギャンブル
- インターネット・ゲーム
- 摂食障害
- 買い物
- 万引き・常習窃盗
- セックス・性行動
- ちかん・盗撮・性暴力
- 暴力・DV・虐待

DARC（ダルク）

Drug Addiction Rehabilitation Center

ダルクプログラムにおける個人的な変化①

認知的な変化 – 問題の否定や薬物使用による悪影響の認知など、薬物使用の影響をどの程度受けているかを理解する。

感情的な変化 – 怒りや孤独などの特定の感情状態が薬物使用につながる可能性を理解し、これらの感情に効果的に対処する方法を学びます。

行動の変化 – 薬物使用が人生全体にどのように影響し、どのような習慣が薬物使用へ向かわせたかを理解する。

ダルクプログラムにおける個人的な変化②

社会的な変化 – ダルクを利用し、ミーティングに参加し、スポンサーとの関係を構築し、再発が懸念されるときはいつでもダルクやスポンサーに連絡し、薬物使用の引き金となる人々との関係を再評価する。

スピリチュアルな変化 – 薬物の使用をやめ、自分の意志よりも大きな力を信じ、信念を発達させ、不道德で非倫理的な行為や薬物使用の結果として他人に与えた害を含む、自分自身の問題を認めること。

ダメ絶対！ だけではダメ絶対！

- 薬物を使うリスクの高い子は、生きづらさや生きにくさを抱えている。
- 薬物やアルコールを使うのは象徴で、解決すべき課題は薬物使用の裏に隠されている抱え切れない感情や心の痛み、貧困、家庭、教育、人権問題など。
- 威嚇教育は、最初の一步については抑止効果はあるけれど、一回逸脱してしまった人間に対して、2回、3回逸脱するのを抑止する効果はゼロに近いどころか、むしろ、逸脱をブッシュしてしまうという問題。
「もう、自分はダメな人間なんだ」と、より悪いほうへ進む敷居を劇的に下げてしまうことがはっきり実証的にわかってきている。
(1998,宮台)

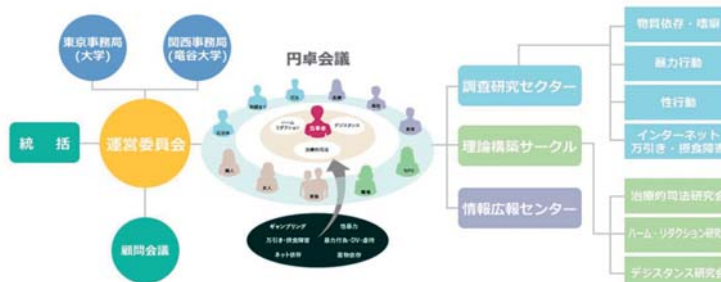
多様な支援と多様な回復

- 底付き概念を手放す
- イネイブリングに気を付ける（過剰な援助行為や尻拭い行為）
- 私たちの回復は精神科医療における寛解や刑事司法における更生からもう一步先へ
- 回復はゴールを意味するものではなく、充実した人生へのプロセス
- 頑固さは命取り、思考の柔軟性が回復を促進

処罰からハームリダクションへ

- **ハームリダクション**
その行動にともなう害や危険をできるかぎり少なくすることを目的としてとられる、公衆衛生上の実践、方略、指針、政策を指す。
- **非犯罪化**
それまで犯罪として処罰されてきた行為を犯罪でなくして処罰をやめること。WHO(世界保健機関)が各国に規制薬物使用の非犯罪化を推奨している。(2014)
個人使用と使用のための所持においてのみ
- **合法化**
嗜好品や医療用として使用可能。一定のルールはある。

嗜癖・嗜虐行動（アディクション）からの回復を支援する研究開発プロジェクトの構成



より良いコミュニケーションとは

- Iメッセージ
- 回復の手助けをする
- 肯定的な言い方をする
- 思いやりのある発言
- 簡単な言葉を使う
- 支援を申し出る
- 具体的な行動に言及する
- くせに名前をつける

新しい回復擁護運動

- アディクションを解決可能な問題として扱う
- 回復における解決の多様性を証明する生きた役割モデルを提供
- 治療や回復支援の多様性、アクセスのしやすさ、質を高める
- アディクションの治療とアディクションの回復を再統合

(Slaying the Dragon (スレイイング・ザ・ドラゴン), ウィリアム・L・ホワイト, 1998)

最後に

- 主体的回復こそが真の回復であり、単に薬が止まっているという状態ではなく、その人らしい生き方に役割や出番を見出す。
その時、アディクトは回復していく。

回復した薬物依存者として称賛されることより、苦しんでいる薬物依存者の希望でありたい

Drug Free & Proud

ご静聴ありがとうございました